優秀作品賞

「原点」

上之段　美保さん

『今日は、年に１回の人間ドック。検査尽くしや。』主人は笑いながら言う。８月の暑い夏の日、毎年恒例行事だ。

私の主人は、２７歳で血液透析導入、３４歳の時、在宅血液透析移行、４１歳の時、死体腎移植を行った。今は、トライアスロンもするほど元気な生活を過ごしている。

主人の家系は、遺伝的に腎臓が悪く、主人も、幼少時から蛋白尿、血尿が出ていた。病院には幼少時から定期的に通っていたが、進学に伴い、県外に出ると病院には受診しなくなった。

就職が決まり、会社の年に１回の人間ドックで早速、検尿で蛋白尿、血尿、さらに、高血圧、胸部レントゲン検査では、心臓肥大、血液検査では、クレアチニン異常値、貧血、至急腎臓専門外来の受診を勧められた。

人間ドックの検査結果と紹介状を持ち、腎臓専門外来を受診した。すでに、クレアチニンも１を超えており、急性糸球体腎炎の治療が始まった。

今までに、内服したことのないようなクレメジンの内服量と、様々な薬の内服が始まり、体調が悪いのと、薬の副作用で悩まされた。

食事が基本と言われ、食事指導も栄養士から受けたが、独身の主人には、頑張っても限界があったようだ。蛋白制限、塩分制限、制限、制限の日々に疲れ果て精神的にも肉体的にも弱気になっていた。

ある定期受診の日、採血で主人が待っていると、一人の老人に声をかけられた。左手には、蛇のような血管がうねり、皮膚はどす黒く、いかにも病人という顔貌だった。

主人を見て、『あんた、まだ若いのに、毎週採血にきているな。あんたの側におると、おれと一緒な匂いがするな。亜鉛臭いな。あんた、腎臓が悪いんとちがうか。』と言った。主人は、『会社の人間ドックで運よく見つかって。人間ドック受けていなければ、今はもうあの世にいっているかもしれませんね。今は、

食事治療と薬物治療でなんとかクレアチニンの悪化を抑えています。』と主人は言った。

人間ドックで早期発見、早期治療を行い、外来通院で４年間なんとか現状の生活を過ごすことが出来た。

そして、２７歳の頃、風邪をこじらし、腎機能が一気に悪化。血液透析導入にはなったが、人間ドックで早期発見、治療を行うことが出来たことは、本当に幸運だったと思っている。

４年間の治療期間、いずれ受け入れなくてはいけない血液透析についてもじっくり考えることができたからだ。

血液透析を導入し、週３回病院で治療を受けながら、社会復帰も可能になった。結婚し、子供にも恵まれた。子供が出来ると、在宅血液透析に移行し、子供と一緒に過ごす時間も増えた。

主人は、病院で定期採血や検査を行っているにも関わらず、会社の人間ドックは毎年必ず行っている。

『あの時、あの人間ドックを受けたから今がある。』主人の口癖だ。

４１歳の頃、死体腎移植を行った。今もいただいた腎臓のおかげで元気よく過ごしている。

私達にとって、人間ドックは早期発見、治療の原点だった。そして、年に１回、自分を見つめ直す、気づく検査だった。健診・人間ドックは、自分自身を知るためにも、いたわるためにも必ず受けたほうがいい。人間、元気なようでもメンテナンスは必ず必要である。一人で気付かないことも、健診・人間ドックで見つけてもらうといい。

自分に気付かないことを発見し、また道を示してくれる。これが人間ドック、健診のいい所だ。まずはみなさん、第一歩、前へ進みませんか。